

6

# 世界とつながる開発教育の実践

鈴木 精 (九里学園高等学校)

## I はじめに

開発教育協会では、「開発教育がめざす社会像を『共生』と『公正』を実現する社会とし、そのための『参加』が開発教育のねらいである」としており、「より公正な地球社会と多文化共生社会をめざして自ら参加していくための知識、技能、態度を養う教育学習活動」と謳っており、開発教育の目的として『参加する』『態度』ということ掲げている。しかし、一方では「開発教育が扱ってきたテーマは地球大の広がりを持っているだけに、一般の人から見れば、『遠い世界のこと』であったり、『関係のないこと』であったりする。そこで、彼らがこれらの問題を『自分のこと』としてとらえなければ学習活動の効果は持続していかない」（田中治彦）。一般の社会に生き、様々な関係性の中に生きている人でさえ、自分と世界との関連性を見いだせず、『遠い世界のこと』となってしまうのだから、ましてや高校生が世界の問題を『遠い世界』の『関係のないこと』と考えてしまうことは仕方がないことのように思える。特に、ここ米沢のような一地方の小さい町で暮らす高校生にとっては、日々の生活の中で『世界』を意識すること、あるいは感じることは難しいと思える。

そこで、本研究では、世界とのつながりを理解することで、地球市民としての自覚を持ち、地球的課題について「自分のこと」として解決へ向けて「参加する態度」を涵養することを目標とした。

本研究の実践の場として、本校では3年生自由選択科目である「国際理解」をあてた。47名が受講したが、アンケートによると、45名の生徒が特に興味があって積極的に選択したわけではなく、仕方なくといったネガティブな理由で選択しているのが現状であった。生徒のほとんどは就職希望者であり、卒業後にすぐ社会人として生きていくのであるからこそ、授業を通して社会の構成員としての自覚とよりよい社会構築への参加態度を促すことは意義があることだと思う。しかし、生徒たちのほとんどはこれまでの生育過程において自己肯定感があまり培われておらず、自信を持たずに、自己表現することを苦手としている。そんな生徒たちが「地球市民」として社会に「参加」していく「態度」を養うためには、自分たちでもできるという実感、あるいは自分たちにもできたという自信が必要であり、授業では、国際協力・貢献は身近なところからやれる、自分たちにもできるという自信と実感を持たせて、自己肯定感を大きくさせること意識して行った。

## II 授業実践

### a. 導入 ～世界に興味を持つ～

1年間の授業の導入として、世界について興味・関心を持たせることを目的に授業を行った。特に理由も興味もなく国際理解という授業を選択してきた生徒に、いかにして興味を持たせるか、世界に目を向かせるかということは1年間のカリキュラムを構築する上で根幹となる大事なものである。「興味は人が何らかの活動を行う中で感じる快の感情をさし、この感情は行動に力を与えるものであり、調整するものである。すなわち、この感情が行動を継続させたり、新たな行動を引き起こしたり、それらの行動の質を決定することになる。すなわち興味は能動的な行為の initiator としての役割を演ずるのである」（赤井、2005）とあるが、開発教育の目的が、学習者一人ひとりの参加を目指すのであれば、その主体的な行動を支える大きな要素として、世界に向けての興味は普段我々が考える以上の意味があると考えられる。

## 実践事例 a

時間	小単元名	学 習 内 容
1	世界の国知ってる？	グループ毎に5分間で世界の知っている国の名前をできるだけたくさん挙げさせ、どれだけ知っているかを競わせる。
2	興味のある国	グループに分かれ、自分たちがよく知らない国の中で、興味のある国について調べ、その国の親善大使・観光大臣としてその国をアピールするプレゼンテーションを行う。
3	世界がもし100人の村だったら	本を読み、概要を説明。その後、気になったテーマ（貧困・人口・宗教・エネルギー・感染症・水・紛争など）について、生徒たちが調べ、発表する。
4	世界がもし100人の村だったら・2	開発教育協会のテキスト「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを行い、世界の問題を疑似体験する。

## b. 世界と自分とつながりを考える ～グローバルシチズンシップ～

ここでは、いかに世界の問題を自分のこととして捉えることができるかを考えて授業を構築した。そのために、自分と世界の心理的なつながりを持たせ、一方で自分と世界の物理的なつながりを理解することで、世界の問題を自分のこととして考えるようにさせたいと考えた。異文化理解も世界との心理的なつながりを生み出すものとして位置づけ、ここでは大切な学習領域として扱った。また、その際に大切にすることは、学校現場にリアリティを持ち込むことである。具体的には協力隊 OV や在日外国人から直接話を聞くことである。実際に外国で現地の人と共に生活し協働した人だからこそ聞ける話、あるいは外国人だからこそ日本との差異を感じながら語れるかの地の話など、どれもリアリティを持つものとして生徒たちに迫るものであり、その人を媒体として見えてくるものやその人そのものに親近感を覚え、また、そういった人と時間をちょっとでも共有したことによる仲間意識がそのままその国の人への親近感やイメージと重なるのではないかと考えた。

また、一方で、日本人に大きなダメージを与えた東日本大震災をめぐる外国からの様々な支援やメッセージを紹介することで、あのような状態で誰しもが不安や恐怖、喪失感を抱えていたからこそ、世界との絆を感じ、心理的なつながりを実感するのではないかと考えた。物理的な世界とのつながりについては、携帯やパーム油など身近にあるものをめぐる事情を取り扱うことで、より理解を深めることができるのではないかと考え、扱った。つまり、世界との心理的なつながりと物理的なつながりを理解した上で、グローバルシチズンシップとはどういうことか考えさせることで、それまでの学習がヒントとして活かさせるのではないかと考えた。

## 実践事例 b

時間	小単元名	学 習 内 容
1	フィリピンについて知る	フィリピンで活動した青年海外協力隊 OV に来てもらい、フィリピンの文化や人々の生活、現地の高校生の様子、日本とのつながりなどについて講演してもらおう。
2	ベネズエラについて知る	ベネズエラ出身の留学生に来てもらい、ベネズエラの食や文化、生活、動植物などについて話してもらおう。また、日本との違いや同じ所についても感想を述べてもらおう。
3	ドイツについて知る	ドイツ出身の大学教授に来てもらい、ドイツの食や文化、生活、動植物などについて話してもらおう。また、日本との違いや同じ所についても感想を述べてもらおう。
4	3. 11大震災から考える	震災後寄せられたメッセージや援助について書かれた新聞記事を全てスクラップにし、それを生徒が調べ、どうして、どんな気持ちで、どんなことを海外の人がしてくれたのか、そのことによって被災地の方がどんな感想を持ったのかなどを調べ、発表する。
5	携帯電話の一生	開発教育協会の「携帯電話の一生」を使用し、NHK の「地球データマップ・南で起きる戦争」を観て、携帯の開発とコンゴでの紛争の関係を学ぶ
6	パーム油の話	開発教育協会の「パーム油の話」を使用し、私たちに身近な食品、インスタントラーメンやチョコレート、食パン、アイスクリーム、粉末ミルクや化粧品、医薬品にパーム油が使用されていること、そのためにインドネシアで熱帯雨林が破壊されていることでの弊害を考える。
7	グローバルシチズンシップって？	グローバルシチズンシップ（地球市民）という言葉から連想される言葉を挙げながら、Oxfam などの地球市民の定義と比較して、地球市民とはどんな人なのかを考える。

## c. 世界の抱える問題 ～グローバルイシュー解決へ～

グローバルイシューを扱ったときに、理解が表層的理解にとどまらないように、グローバルシチズンとし

での自覚を持ってから、グローバルイシューに向かわせた。つまり、ここでは、先に世界とのつながりを実感し、地球市民としての自覚を涵養してからグローバルイシューを行うことで、「自分のこと、自分に関係のあること」として、その後の解決に向けての参加態度がより能動的、積極的になるのではないかと考えた。そのため、ここまでの段階で、興味を喚起し、世界とのつながりを理解し、地球市民とはどういうものか考えた上で、その地球市民として、グローバルイシューに向かわせた。当然、その目的は解決へ向けての参加態度である。そのため、単に貧困や児童就労などを学習するのではなく、必ず最後に自分たちにできることを模索したり、チョコレートの買い方など、その具体的な行動の参考になる学習をセットにしたりするなど行った。

#### 実践事例 c

時間	小単元名	内 容
1	貧困とは？	ザンビアのスラムの様子やそこに暮らす人々の状況や問題を写真と共に紹介しながら、貧困のサイクルや現状を学ぶ。
2	カカオ農園で働く子供	カカオ農園で働く少年達の労働の様子、夢など、また、その貧困をつくり出した先進諸国の政策などを学び、自分たちには何が出来るかを考え、ランキングする。
3	How to choose!	チョコレートの買い方を通して自分たちにできる最も身近な国際協力を学習する。CSR の考え方を大切にし、どの会社の商品を買うことで、どんなことができるか、それぞれの CSR を調べ、グループ毎にアクションプランを作成する。あわせてフェアトレードを紹介する。
4	世界の水事情	水という資源を見直し、世界の水事情を紹介しつつ、日本の水の消費、使用量、バーチャルウォーターなどについて学び、自分たちにできることは何か考え、発表する。
5	コンビニ弁当	コンビニ弁当の事情を学び、廃棄処分の量や消費量、素材の産地を考え、フードマイレージについて理解し、自分たちのコンビニ弁当との付き合い方を見直す。
6	比べて選ぶ世界の食卓	前時の続編として、ベトナムやザンビア、ガーナなどの食事を紹介しながら、日本の多様な食生活と低い自給率の関係、外国から食材を輸入することのデメリットを理解し、デメリット解決のための方法を考え、有効性、実用性の方面から考察する。

#### d. 国際協力 ～実践から未来へ～

ここまで積み重ねてきた学習の最後として、実際に自分たちでアクションプランを作り、実際に何か国際協力をやってみるという実践を通して、先述のとおり、国際協力を身近なものにし、自信をつかませたいと考えた。

また、最後にもう一度異文化理解、特に、日本における多文化社会を考え、互いの文化を尊重し、共生していく大切さを心に刻んで社会に出てもらいたいとの思いがあった。桐谷正信も「1980年代以降、日本の「内なる国際化」へと関心が向けられ、彼らの存在が自明の存在となり、文化的な多様化が進む多文化社会として、日本をどのように創っていくかが問われ始めた。マジョリティである日本人と様々なマイノリティとが共生していく「多文化社会」として日本を捉えなおす必要が迫ってきたのである。」と述べている。そこで、独自の文化を育み、今なお、彼らの価値観を大切にしながら誇りを持って生きているアイヌ人から学ぶことは多いだろうと考え、アイヌ人による講演を計画した。授業者自身がアイヌの文化を学び、レラの会、東京アイヌ協会の2団体から講演を行っていただき、アイヌの文化を通して今後生きていくうえで大切となる考え方を学んでもらい、多文化社会でどのように生きるべきかを考えてもらおうと考えた。

#### 実践事例 d

時間	小単元名	授 業 内 容
1	国際協力について知る	日本の ODA についての DVD を観て、日本の国際援助における基本的姿勢、実践、青年海外協力隊について学び、あわせて青森県立むつ工業高校の国際協力についての取り組みを学ぶ。
2	青年海外協力隊の活動	ザンビア共和国での活動と、問題点などを紹介し、ザンビアの抱えている問題、活動の目的・目標、課題等を学ぶ。
3	アクションプラン	実際にアクションプランを作成し、計画・準備・実行する。 具体的にはザンビアの裁縫学校で出た切れ端を再利用し、シュシュや絵はがきを作成し、販売し、その売り上げでボールや教材を購入し、寄付するというものになった。
4	アイヌ人を知ろう	アイヌの歴史、文化、和人との関係などを学び、さらに先住民に対する国連の動きを学習する。
5	アイヌから学ぶ	レラの会、東京アイヌ協会から3名に来ていただき、アイヌ文化の紹介をしてもらう。

### Ⅲ まとめ

ベースとなる世界との心理的なつながりが年間の授業で上手く構築できたと思われるが、そのために効果的であったのが、実際に外国人や協力隊 OV とじかに触れ合う時間であり、また、最後にアイヌの方たちと生徒たちが、輪になって手を取り合ってアイヌの踊りを踊ったが、まさにその経験こそが、今後の多文化社会における共生としての糧として、彼らの中に生きていくものと思う。

大震災を取り扱った授業も非常に効果的であり、あれだけの被害を受け、生徒たちの心にも喪失感、不安、絶望感など複雑なものがあっただけに、海外からの援助やメッセージ、多くのボランティアは嬉しかったようで、単に調べるという作業を通り越して、海外の人との絆を感じながら、人々の気持ちを刻みつける授業となった。

自分たちの国際協力として、ザンビアから布を送ってもらい、シュシュ、絵はがきを作成し、販売することとなったが、リサイクル、自分たちでも作ることができるといった理由のみならず、ザンビアの布を使用することによって、購入した人が、ザンビアについて考えたりするきっかけにしたいといった理由や、商品について説明する際に、ザンビアについて知らせる（伝える）ことができるといった理由があった。これは地球的課題を学習した際に、必ず解決へむけて自分たちにできることを考えさせてきたが、知ることと知ったこと（学んだこと）を伝えることが大切だということの重要性を形にしたのではないかと思う。また、布を通してザンビアの人たちとつながってもらいたいという地球市民としての仲間意識の表れと捉えることができる。そういった意味では、年間を通して学習してきた積み重ねの中で、生徒たちの内に、地球市民として国際貢献したいという思いが生まれ、その思いがシュシュという形として表れたと考えることができる。さらに、国際協力について実際にやってみたという経験が、より身近なものとして感じられるようにし、今後の生徒たちの姿勢に影響を与えていくものと思われる。

生徒たちのアンケートによると、「国際協力は難しい」「だれか他の人がやること」「自分には関係がない」「自分には無理・できない」といったものから「身近になった」「自分にもできる自信がついた」というものに変化したが、もうひとつ大きな変化として、生徒たちは「自分たちには国際協力をしていく責任がある」と考え始めていることがあげられる。これは単に実際に自分が何かを成しえたということのみならず、授業を通して世界と自分との関係性を理解し、その関連の中で世界の中での自分たちの立場や生き方を考えるようになった結果なのではないかと考察できる。

世界の人々や国、あるいは貧困や環境問題等への興味、関心についても、生徒へのアンケートによると、授業前の段階では全くない、あまりないを含めて関心がない状態であったが、現在はある、かなりあるがほぼ全員が回答している。その理由として、「自分の生活が世界の人々に支えられていることがわかり、そのために辛い思いをしている人がいることに申し訳なく感じた」「大震災でこんなにも多くの人々が日本に対して援助してくれたのに、自分たちが目を背けるわけにはいかない。みんなとの絆を感じたから」「世界の人々に携帯や食物を与えてもらっているようなものなので、世界の人々を援助しないと自分たちの生活も立ち行かなくなると感じた」など、相互依存の関係（物理的つながり）、地球市民としての仲間意識（心理的つながり）の双方ともに理解度が深くなったことが示された。

実際の行動変容においては、些細なことではあるが、親と買い物に出かけたとき、国産かどうか、あるいはどんな企業が話しながら選ぶようになったり、食卓で食材が何処から来ているのか話題にするようになったり、あるいはよく買う商品の企業について調べ、社会貢献度が高いと思われる企業を勧めて親に購入してもらったという生徒もいた。好ましい社会構築へ参加する態度の涵養を目標として挙げている中で、継続的な社会参加の視点から、こういった小さいことであれ、自分でできることを実行しているということは大きな意味をもつものではないかと考える。今後、彼らが具体的にどのように社会に関わっていくか、その一端を示せたことに意味があった。

#### 【参考文献】

- 赤井 誠生 2005年 「大阪大学大学教育実践センター紀要」第2号
- 大津 和子 2011年 「グローバル時代の国際理解教育－理論と実践をつなぐ－」日本国際理解教育学会編著 明石書店
- 田中 治彦 2008年 「国際協力と開発教育」 明石書店
- 開発教育協会 2003年 「参加型学習で世界を感じる」開発教育協会
- 前田 美子 2003年 「国際協力の地平」 NGO 活動教育研究センター 昭和堂
- Oxfam international, Education for Global Citizenship ; A Guide for Schools